

蛍

池松 孝子

小田急線向ヶ丘遊園駅近く生田緑地の「ほたるの国」を訪ねたことがある。コロナ禍で今年も「閉国」しているが、毎年、わずか半月の間に一万人を超える人が訪れる。蛍ボランティア、蛍ガイドの協力を得て、薄闇にほんのり浮かぶゲンジボタルを楽しむことができる。

蛍に光を当てるとその後、数日は発光できなくなるということで、懐中電灯や携帯電話は使用禁止である。子供が履いている踵の光る靴も禁止、など細かく配慮されている。足元に気を付けながらそぞろ歩く。あちこちでフワフワと優しく浮かぶ幻想的な光景が何ともうれしい。この「ほたるの国」に台湾からの留学生を案内したことがあるが、台湾にも初夏に蛍を鑑賞する行事があると喜んでいた。

蛍は古くは「日本書紀」に初出、その後「万葉集」にも登場するが、全四千五百十六首のうち、たった一首しか詠まれていない。当時、暗闇に浮かぶ蛍の光は怪しい不気味なものだったに違いない。今と違って、夜は漆黒。光る蛍は熱を持たないうえ、相当な群れで飛んでいたことだろうから。

時代はくだって平安文学となると、清少納言の「枕草子」である。「春はあけぼの」の冒頭で「夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる」とある。そして紫式部「源氏物語」だ。闇夜に光り飛ぶ蛍を、身を焦がす恋と見立てるようになる。

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

和泉式部

娘が小学生の頃、友達から蛍を何匹かもらった。飼えるわけないと止めるが聞かない。親の方が根負けして、段ボールに水を入れネットを被せた。翌日、娘は塾の先生に蛍は何を食べるか聞いた。先生の答えは「何も食べない」というものだった。タニシなどの巻貝でもと、親たちは心配したが。

その翌日、「蛍二十日に蟬三日」の通り蛍は動かなくなっていた。蛍の口は退化していてかろうじて水をなめるくらいで、幼虫時代に摂取していた栄養素だけで繁殖活動をするのだという。